View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

氏　　名	池田　知佳
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第 6341　号
学位授与の日付	2021 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Clinicopathological analysis of 34 Japanese patients with EBV-positive mucocutaneous ulcer （EBV 陽性粘膜皮膚潰瘍の日本人患者 34 名に関する臨床病理学的解析）
論文審査委員	教授 松川昭博　　教授 森実　真　　准教授 團迫浩方

学位論文内容の要旨

Epstein-Barr ウイルス陽性粘膜皮膚潰瘍(EBVMCU)は粘膜または皮膚に限局した潰瘍性病変で、組織学的に EBV 陽性異常 B 細胞の増殖を定義とする。臨床的には加齢または免疫抑制患者に発症し、典型例では自然消退することが多い。EBV 陽性細胞は B 細胞マーカーである CD20 を発現するため、EBV 陽性びまん性大細胞型 B 細胞性リンパ腫(DLBCL)との鑑別が必要となる。EBVMCU の特徴を明らかとするために、EBVMCU34 例の臨床病理学的、遺伝子学的特徴を解析し、EBV 陽性 DLBCL24 例、EBV 陰性 DLBCL25 例との比較検討を行った。EBVMCU 症例は全例限局性潰瘍性病変を有していた。31 症例(91%)がメトトレキサートなどの免疫抑制薬を使用していた。予後追跡の可能であった症例はすべて、免疫抑制薬の中止あるいは化学療法後にて良好な予後を示した。EBVMCU は他の 2 群と比較して、可溶性インターロイキン 2 受容体(P <0.001、P = 0.025)や乳酸デヒドロゲナーゼ(P = 0.018、P = 0.038)が低値であった。組織学的には EBV 陽性 B 細胞の増殖が観察され、この細胞の形態により(1)polymorphous、(2)large cell-rich、(3)classic Hodgkin lymphoma-like、(4) mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma-like に分類された。IGH 遺伝子再構成は 3 群において 44%、32%、58%で観察されたが、有意差はみられなかった。以上より、病理学的遺伝子学的所見のみでは EBVMCU と EBV 陽性 DLBCL を鑑別することは困難で、両者の鑑別には臨床情報が重要であると考えられた。

論文審査結果の要旨

Epstein-Barr ウイルス陽性粘膜皮膚潰瘍（EBVMCU）は自然消退するが、EBV 陽性びまん性大細胞型Ｂ細胞性リンパ腫（DLBCL）との鑑別が必要である。本研究では、EBVMCU の特徴を明らかにするため、DLBCL との比較検討を行った。自験例 EBVMCU34 例、EBV 陽性 DLBCL24 例、EBV 陰性 DLBCL25 例を解析したところ、EVBMCU では DLBCL２群に比較して可溶性 IL-2R や LDH が低値であったが、IGH 遺伝子再編成は３群間に有意差はなかった。以上より、病理学的遺伝子学的所見では３群の鑑別は困難であるとの結論にいたったものの、本邦で初めて EBVMCU の特徴を明らかにし、EBVMCU は組織学的に４群に分類できることを提唱した点で評価できる。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。